ふるさとに寄する讃歌

夢の総量は空気であった

坂口安吾

青空文庫

私は蒼空を見た。蒼空は私に泌みた。私は瑠璃色の波に嘘ぶ。私は蒼空の中を泳いだ。そして私は、もはや透明な波でしかなかった。私は磯の音を脊髄にきいた。単調なリズムは、其処から、鈍い蠕動を空へ撒いた。

私は窶れていた。夏の太陽は狂暴な奔流で鋭く私を刺し貫いた。その度に私の身体は、だらしなく砂の中へ舞い落ちる靄のようであった。私は、私の持つ抵抗力を、もはや意識することがなかった。そして私は、強烈な熱である光の奔流を、私の胎内に、それが私の肉であるように感じていた。

白い燈台があった。三角のシャツポを被っていた。ピカピカの海へ白日の夢を流していた。古い思い出の匂がした。佐渡通いの船が一塊の煙を空へ落した。海岸には高い砂丘がつづいていた。冬にシベリヤの風を防ぐために、砂丘の腹は茱萸藪(グミ)だった。日盛りに、螽(きりぎりす)※が酔いどれていた。頂上から町の方へは、蝉の鳴き泌む松林が頭をゆすぶって流れた。私は茱萸藪の中に佇んでいた。

その頃、私は、恰度砂丘の望楼に似ていた。四方に展かれた望楼の窓から、風景が——色彩が、匂が、音が、流れてきた。私は疲れていた。私の中に私がなかった。私はものを考えなかった。風景が窓を流れすぎるとき、それらの風景が私自身であった。望楼の窓から、私は私を運んだ。私の中に季節が育った。私は一切を風景に換算していた。そして、私が私自身を考えた時、私も亦、窓を流れた一つの風景にすぎなかった。古く遠い匂がした。しきりに母を呼ぶ声がした。

私は、求めることに、疲れていた。私は長い間ものを求めた。そのように、私の疲れも古かった。私の疲れは、生きることにも堪え難いほど、私の身体を損ねていた。私は、ときどき、私の身体がもはや何処にも見当らぬように感じていた。そして、取り残された私のために、淡い困惑を浮べた。私の疲れは——たとえば、茱萸の枝に、私は一匹の昆虫を眺めているのであった。昆虫は透明な羽をかぼそく震わせていた。私は私の身体が、また透明な波であることに気付いていた。それは靄よりも軽い明暗でしかなかった。昆虫の羽の影が、私の身体にあわく映ってゆれた。赤熱した空気に、草のいきれが澱んでいた。昆虫は飛び去った。そしてその煽りが鋭く私の心臓を搏撃したように感じられた。太陽のなかへ落下する愉快な眩暈に、私は酔うことを好んだ。

長い間、私はいろいろのものを求めた。何一つ手に握ることができなかった。そして何物も掴まぬうちに、もはや求めるものがなくなっていた。私は悲しかった。しかし、悲しさを掴むためにも、また私は失敗した。悲しみにも、また実感が乏しかった。私は漠然と、拡がりゆく空しさのみを感じつづけた。涯もない空しさの中に、赤い太陽が登り、それが落ちて、夜を運んだ。そういう日が、毎日つづいた。

何か求めるものはないか？

私は探した。いたずらに、熱狂する自分の体臭を感ずるばかりだった。私は思い出を掘り返した。そして或日、思い出の一番奥にたたみこまれた、埃まみれな一つの面影を探り当てた。それは一人の少女だった。それは私の故郷に住んでいた。辛うじて、一、二度、言葉を交した記憶があった。私が故郷を去って以来——十年近く、会うことがなかった。今は生死も分らなかった。而し、掘り出した

埃まみれな面影は、不思議に生き生きと息づいていた。日数えて、私は、その面影の生気と、私自身の生気とに区別がつかなくなっていた。私は追われるように旅に出た。煤煙に、頬がくろずんでいた。

私はふるさとに帰りついた。

ふるさとに、私の生家はもう無かった。私は、煤けほうけた旅籠屋の西日にくすんだ四畳半へ、四五冊の古雑誌と催眠薬の風呂敷包みを投げ落した。

雪国の陰鬱な軒に、あまり明るい空が、無気力や、辛抱強さや、ものうさを、強調した。鉛色の雪空が、街のどの片隅にも潜んでいた。街に浮薄な色情が流れた。三面記事が木綿の盛装をこらして……。私はすでに、エトランジェであった。気候にも、風俗にも、人間にも、そして感情にも。私は、暑気の中に懐手して、めあてなく街を歩いた。額に、窓の開く音が、かすかに、そして爽やかに、絶え間なくきこえていた。その音は、街路樹の睡った、しずかに展ける一つの路を私に暗示した。それは如何なる寂しさにも、私に路を歩ませる力を与えた。私は疑い深い目で、行き交う全ての女を見た。行き過ぎてのち、あれがその人ではないのかと、半ば感情を皮肉るように、私は常に思い込もうとした。私は腹の中で笑った。私は、かたくなに振り向くことを怖れた。全ては偶然であれ。私の悲しみも、私の恋人も（いわば笑うべきインテロゲエションマークである恋人も）、偶然と共に行き過ぎよ。あれがその人ではなかったかと思う追悔によって、おまえの悲しみは玉となる日があるであろう、と。

彼女とは？　……いったい、彼女とは誰であろうか？　つきつめて思う時、彼女の面影は、いつもその正確な輪廓を誤魔化し、私の目から消え失せるのであった。消えてゆく形を追うて、私はいそいで目をつぶるのであった。もはや、暗闇だけがそこにあった。私はそこに、一つの面影を生み出そうとした。黒色の幕に、私は白色の円形をおいた。私はそれに、目を加え、鼻を加え、口を加えようとした。私は、私のミューズが造型の暗示を与えるまで、しずかにその円を視守ろうと努めるのであった。白色の円は意地悪く伸縮した。そして私が一点を加えようとする度に、陰険に、他の一点を消し去ろうとした。私はそれを妨げるために、私の点描に速力を加えるのであった。私の癇癪にそうて、円も赤旗のように劇しく揺れた。あきらめて、私は目を開けるのであった。さわやかに目に泌むものは、家や木や道や、すべて太陽に呑まれた現実の夏であった。私はそれらを、奇蹟のように驚異して、しばらく呆然と視いるのであった。頬に這う汗を、私は知らず拭いていた。

彼女はいわば、私の中に、このように実感の稀薄な存在であった。私は、少女の彼女を記憶の中に知っていた。それは疑いもなく真実であった。しかし彼女は、私の知らぬ間に、私の中に生長していた。そして、私の中に生長した彼女は、もはや現実に成育している彼女とは別の人であるのかも知れなかった。私の中の彼女は、いわば一つの概念であり、一つの象徴であるのかも知れなかった。しかし、その概念を追うて、北国の港町へ太陽を泳いできた私は、概念でもなければ、象徴でもなかった。それは現実の私だった。現に今、ものうい路に埃を浴びて歩いていた。疲れてはいるが、生命と、青春を持っていた。それ故彼女も生きていた。彼女は力であった。一目見ることのほかに、そして彼女を追うことの外に、私に何の計算も

なかった。

かような私を眺めやるとき、私は私が、夢のように遠い、茫漠とした風景であるのに気付いていた。私は、ふるさとに点々と私の足跡を落しながら、この現実の瞬間が、思い出されている夢であるような遠さに、いつも感じつづけていた。私は、その夢を、その風景を、あかずいとおしんだ。風景である私は、風景である彼女を、私の心にならべることをむしろ好むのかも知れなかった。そして風景である私は、空気のように街を流れた。街を燕が、そして私を、横切っていった。

街の埃と、街の騒音が、深く私に泌みていた。ただ孤り、しずかな杜に潜む時でも、皮膚に泌みた街の騒音が、私の身体をとりかこんでいた。砂山で、高くはれた夜の下にも、皮膚にうごめく雑沓の跫音をきいた。それは夜空へ散っていった。そして、発散する騒音と入れ換りに夜の静寂が、又ある時は磯の音が、さえざえと私に泌みた。何物か、私の中に澄み切ろうとする気配がしていた。夜空が、すべて宇宙が、甘い安心を私に与えた。

或る夜は又、この町に一つの、天主教寺院へ、雑沓の垢を棄てにいった。僧院の闇に、私の幼年のワルツがきこえた。影の中に影が、疑惑の波が、半ばねぶたげな夢を落した。ポプラアの強い香が目にしみた。さわがしく蛙声がわいた。神父はドイツの人だった。黒い法衣と、髭のあるその顔を、私は覚えていた。そのために、羅馬風十字架の姿を映す寂びれた池を、町の人々は異人池と呼んだ。池は、砂丘と、ポプラアの杜に囲まれていた。十歳の私は、そこで遊んでいた。ポプラアの杜に、あたまから秋がふけた、時雨が、けたたましく落葉をたたいて、走りすぎた。赤い夕陽が、雲の断れ間からのぞいた。私はマントを被っていた。寺院の鐘が鳴った。釣竿をすてて、一散に家へ、私は駈けた。降誕祭に、私は菓子をもらった。ポプラアの杜を越えて、しもたやの燈りが見えた。窓が開け放してあった。裸の男女が食事していた。たくましい筋肉が陰を画いた。昔はそこに、私の友人が住まっていた。私より四五歳年上であった。町の中学で一番の暴れ者だった。柔道が強かった。私は一年生だった。私は毎日教室の窓をぬけ出して、海岸の松林を歩いた。彼は優しい心を持っていた。彼によく似た私を、彼の堕ちた放埒から遠ざけるために、はげしく私を叱責した。人々は、私を彼の少年だと誤解した。私は町の中学を放校された。彼は猟に出て、友人の流れ弾にあたって、死んだ。

僧院の窓はくらく、祈祷の音も洩れなかった。何事か、声高く叫びたい心を、私は切に殺していた。騒がしい食膳の音が流れていた。

姉が病んで、この町の病院へ来ていることを知った。黒色肉腫を病んでいた。年内に死ぬことを、自分でも知っていた。毎日ラジウムをあてていた。私の父も肉腫で死んだ。その遺伝を私は別に怖れなかった。

姉は聡明な人だった。子供のために、よき母であった。そのために、姉は年老いて、少女の叡智を失わなかった。姉は私を信じていた。それ故、私は、姉に会うことを欲しなかった。全て親密さは、風景である私にふさわしくなかった。それは、苦い刺戟を私に残した。私は襤褸であった。人の親密さを、受けとめるに足る弾力は、私の中に已になかった。同じ土地に、姉の病むをききながら、見舞に行くことを、毎日見合わせた。彷徨の行きずりに、ときどき、薬

品の香が鼻にまつわった。私は目を閉じて、知らぬ顔をした。私はアイスクリームを食べた。匙を、ながく、しゃぶっていた。

太陽の黒点を、町の新聞が論じていた。

訪れはせぬつもりで、病院の前へ私は来ていた。私は往復した。看護婦が私を見ていた。私は病院へ這入った。姉は出迎えに走り出た。常人と殆んど変りは見えなかった。ただ、死ぬことを心に決めた、実に淋しい白さがあった。田舎から見舞に来た子供達が、丁度帰ったあとだった。たべちらした物の跡が、部屋一面に散乱していた。楽しげな子供達を乗せた汽車が、私の目に勇ましく鉄橋を渡った。子供を楽しく暮させるために、如何なる仮面をも創り出す人だった、私の姉は。姉は子供について語った。長女に結婚の話が持ち上っていた。その心配で、姉は病を忘れがちだった。私は煙草を何本もふかした。姉は私にマッチを擦った。姉は私の吸いがらを掌にのせて、長くそれをもてあそんでいた。夢に植物を見ると姉は語った。

「お前のために素敵な晩餐会を開きたい……」

その言葉を、姉は時々くり返した。私は、ルイ十四世が、かつて開いた宴会の献立を、姉に語った。姉は山毛欅の杜で食事をしたことがあったと語った。虚勢を張って、二人はいつまでも、空々しい夢物語をつづけた。毎日病院を訪れることを約束した。子供達の見えない日には、私が病院に泊まることを約束した。

雪国の真夏は、一種特別の酷暑を運んだ。ひねもす無風状態がつづいた。そのまま陽が落ちて、夜も暑気が衰えなかった。姉はしきりに氷を摂った。窓の外に、重苦しく垂れている無果花の葉があった。それに月が落ちていた。姉はそれに水を撒いた。

数日の中には、流石に一人知り人に出会った。二三の立ち話を交えて、笑うこともなく、別れた。又一人会った。彼は年老いた車夫だった。私に、車に乗ることを、しきりにすすめた。私をのせて、車は日盛りに石のある道を廻転した。年と共に隆盛である幸福を、歌うように彼は告げた。私は、よろこばしげに笑った。幌がふるえた。ビヤホールに一人の女給が、表戸を拭いていた。車夫の家で、私達は水瓜を食べた。

彼女の家に、別の家族が住んでいた。幼かった少女が、背をもたせて電線を見ていた門は、松の葉陰に堅く扉を閉じていた。三角の陽が影を切った。

私は耳を澄ました。私は忍びやかに通りすぎた。私は窓を仰いだ。長くして、私はただ笑った。私は海へ行った。人気ない銀色の砂浜から、私は海中へ躍り込んだ。爽快に沖へ出た。掌は白く輝いて散乱した。海の深さがしずもっていた。突然私は死を思い出していた。私は怖れた。私の身体は、心よりも尚はやく狼狽しはじめていた。私の手に水が当らなくなっていた。手足は感覚を失った。私の吐く潮が、鋭い音をたてた。私は自分が今吹き出していい欲望にかられていることを、滑稽な程悲痛に、意識した。私は陸（オカ）へ這い上った。私は浜にねた。私は深い睡りにおちた。

その夜、病院へ泊った。私は姉に会うことを、さらに甚しく欲しなかった。なぜなら、実感のない会話を交えねばならなかったから。そして私は省るに、語るべき真実の一片すら持たぬようであった。心に浮ぶものは、すべて強調と強制のつくりものにみえた。私は偶

然思い出していた。彼女に再び逢う機会はあるまい、と。それは、意味もなく、あまり唐突なほど、そして私が決して私自身に思い込ませることが出来ないほど、やるせない悲しみに私を襲うのであった。私は、かような遊戯に、この上もなく退屈していた。しばらくして、もはや無心に雲を見ていた。

姉も亦、姉自身の嘘を苦にやんでいた。姉は見舞客の嘘に悩んで、彼等の先手を打つように姉自身嘘ばかりむしろ騒がしく吐きちらした。それは白い蚊帳だった。電燈を消して、二人は夜半すぎるまで、出まかせに身の不幸を歎き合った。一人が真実に触れようとするとき、一人はあわただしく話題を変えた。同情し合うフリをした。嘘の感情に泪ながした。くたびれて、睡った。

朝、姉の起きぬうちに、床をぬけて海へ行った。

港に六千噸の貨物船がはいった。耳寄りなニュースに、港の隆盛を町の人々が噂した。私は裏町に、油くさい庖厨の香を嗅いだ。また裏町に、開け放された格子窓から、脂粉の匂に噎んでいた。湯垢の香に私はしみた。そして太陽を仰いだ。しきりに帰心の陰が揺れた。

東京の空がみえた。置き忘れてきた私の影が、東京の雑沓に揉まれ、蹂みしだかれ、粉砕されて喘えいでいた。限りないその傷に、無言の影がふくれ顔をした。私は其処へ戻ろうと思った。無言の影に言葉を与え、無数の傷に血を与えようと思った。虚偽の泪を流す暇はもう私には与えられない。全てが切実に切迫していた。私は生き生きと悲しもう。私は塹壕へ帰らなければならない。と。

私達はホテルの楼上に訣別の食卓をかこんだ。街の灯が次第にふえた。私は劇しくイライラしていた。姉は私の気勢に呑まれて沈黙した。私達は停車場へ行った。私達は退屈していた。汽車がうごいた。私は興奮した。夢中に帽子を振った。

別れのみ、にがかった。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾選集　第三巻小説3」講談社
　　1982（昭和57）年2月12日第1刷発行
底本の親本：「黒谷村」銀座出版社
初出：「青い馬」
　　1931（昭和6）年5月1日号
入力：高田農業高校生産技術科流通経済コース
校正：小林繁雄
2006年9月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ふるさとに寄する讃歌

夢の総量は空気であった

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　坂口安吾
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/